

乳幼児期（1歳から3歳児）の言語獲得について －「絵本の読み聞かせ」とリテラシー

浅木尚実・末永恭子¹

キーワード

乳児・幼児期前期・「絵本の読み聞かせ」・言語発達・絵本・模倣、反復・共同注意・リテラシー・親の関与・ECEC・保育の質の向上・PIRLS

要約

乳幼児期の中でも、特に1歳前後の初語出現以降から3歳頃までは言語爆発期といわれ、母国語である日本語取得の重要な時期である。また、言語獲得時の環境は、周囲の身近なおとなの働きかけによって大きく左右される。40か国で行われたPIRLS（国際読解力）調査では、義務教育に就学する前の家庭での読み聞かせに関する学習活動と、10歳時点での読解力には正の相関があると報告されている。

OECD諸国における乳幼児期教育とケア（ECEC：Early Childhood Education and Care）政策に関して、『OECD保育の質向上白書』では、「家庭と地域社会との関与」の重要性が指摘され、人生の始まりの根幹をなす「家庭での学習環境の質的向上」にも注目が集まっている。本研究は、政策レベル4「家庭と地域社会の関与1」に示された「家庭での学習環境が子どもの学習成果に与える影響」に焦点を当てたテーマとなっている。

研究方法としては、2018年より、研究対象を母親と1歳から3歳までに焦点をあて、母子相互間の「絵本の読み聞かせ」によるリテラシーに関する研究事例を縦断的に蓄積してきた。愛着形成が結ばれている母親と共に、子どもが主体的に繰り返し読み聞かせを要求する絵本を共有する場面を録画、録音によって記録した。絵本の絵を見ながら耳で文章を吸収することを繰り返し楽しんできた子どもは、2歳、3歳児になると、ほぼ絵本と同じ文章を暗唱する。その結果、絵本で認知した言語を復唱し、日常的に活用することを可能にしている。本論はエスノグラフィーの手法¹より、母子で繰り返し共有

¹浅木尚実：白鷗大学教育学部（n-asagi@fc.hakuoh.ac.jp）末永恭子：医療法人惇慈会日立港病院

した「絵本の読み聞かせ」が子どもによる語彙の構築や言語発達に大きな役割を果たしている可能性を説いた。(本論における「リテラシー」は、国語能力及びコミュニケーション能力と定義する。)

はじめに

言葉は、生まれて間もない新生児には全く身につけていない文化活動である。人が生存していくためには、言葉はコミュニケーションや思考、また自己統制の道具として必要不可欠である。言葉には、「聞く、話す、書く、読む」という4段階の育成が存在する。従来の国語教育におけるリテラシーは、「読む・書く」能力の育成であったが、現行の小学校学習指導要領「国語」には、「聞く・話す」能力の育成もリテラシー教育として重点が置かれている。保育士養成校において、「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」に、乳幼児期の子どもの言葉の「ねらい」・「内容」が含まれているが、この時期の子どもは、「聞く・話す」能力育成に力を注ぐ必要がある。特に、乳児期後期(1歳から3歳未満児)から、幼児期前期(3歳)(以降、「1歳から3歳児」と称す)における言語獲得の環境は、周囲の身近なおとなの働きかけによって大きく左右される。

本稿では、乳幼児の言語環境のひとつである「読み聞かせ」を「おとなが子どもに対して本を読んで聞かせたり、子どもと一緒に同じ本を読む場を共有すること」と定義する。「絵本の読み聞かせ」は、20世紀までは、0歳から3歳未満児の子どもにはあまり必要ないと考えられていた。絵本は3歳以上から理解が可能で、乳児には絵本を認知するのは困難であるという見解が主流であった。しかし、2000年の子ども読書年に開始されたイギリス発祥の「ブックスタート」を皮切り、「あかちゃん絵本」の出版点数が増加し、育児世代の家庭にも広く普及するようになった。1歳から3歳児での「絵本の読み聞かせ」とは、おとなが絵本の文章を音読した言葉を、子どもが耳で聞き、言語中枢の脳を刺激する。聴覚を刺激された言葉を子どもは、視覚的に絵本の絵で理解し、言葉の意味や発音を習得していく。

本研究では、2018年より、母親と1歳から3歳児を対象に、家庭でのくつろいだ場所における研究事例を縦断的に蓄積してきた。子どもの言語発達の過程で、「絵本の読み聞かせ」によって繰り返し培われてきた絵本に描かれている文章を1歳から3歳児が模倣し、暗唱することに注目した。親子で共有する絵本から、母親が読む絵本の文字を音声で、耳から吸収する子どもは、絵を目で追いながら、絵本の内容を理解し、2歳、3歳になると、ほぼ絵本と同じ文章を暗唱する。その結果、絵本で認知した言語を復唱し、日常生活でも活用していく。絵本による音声学習が、子どもの言語発達に大きな効果があると仮定し、対象とする子どもの言語記録（質的データ）としてとらえ、その過程から意味づけし探求していく。

第1章で、「読み聞かせ」の先行研究と子どもの言葉の発達過程を照査し、第2章では、実際の事例を紹介する。第3章では、絵本がもつ特性に鑑みながら検証し、第4章でまとめを行う。

第1章 言語獲得と子どもの能力

1. 「読み聞かせ」研究

絵本の読み聞かせがリテラシーの学習的効果があるという研究は、PIRLS（国際読解力）調査でⁱⁱも明らかになっているところである。「40か国で行われたPIRLS（国際読解力）調査では、義務教育に就学する前の、家庭での読みに関する学習活動と、10歳時点での読解力には正の相関がある」と指摘されている。

また、『OECD保育の質向上白書』ⁱⁱⁱでは以下の報告がされている。

幼い頃から家庭で物語を読み聞かせる：親のかかわり方でよくあるのは、子どもの「読み」の発達を助けることである。このことは十分に研究されており、効果のあることも知見として提供されている（Keating and Taylorson, 1996）アメリカで3歳児と4歳児を対象に行われた研究からは、家庭での乳幼児期の学びの活動が違いを生み出すことが明らかになっている。たとえば、頻繁に本を読んでもらったり物語を聞かせ

てもらったりした子どもは、アルファベット文字すべての認知ができたり、20以上までの数をかぞえられたり、自分の名前を読んだり書いたりできる子どもが多かった。加えて、文字や単語、数を数えてもらい日常的に図書館に連れて行ってもらえる子どもたちには、読み書き能力（リテラシー）の芽生えがみられた（Nord et al. 1999）

また、内田伸子は「幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響：「共有型」と「強制型」の横断的比較」^{iv}において、母親の養育態度が母子相互作用において、情緒的側面から考察する研究を報告している。ここでは、子どもが主体的に絵本場面を楽しむためには、母親の「絵本の読み聞かせ」の頻度と質が大きく関わっていると説明されている。森慶子は、「絵本の読み聞かせ」の効果の脳科学的分析－NIRSによる黙読時、音読時との比較・分析－^vにおいて、「絵本の読み聞かせ」時に、ほとんどの中学生、高校生が前頭前野における血流が減少という結果を報告している。この結果は、秦羅雅登^{vi}が、実母子間で行った「絵本の読み聞かせ」課題で、前頭前野の血流減少が起こったという結果と同等である。川島隆太と安達忠夫^{vii}は、前頭前野の血流減少は「ところが癒されること」とイコールであると結論付けている。

2. 「絵本の読み聞かせ」の心理学支援理論

このような効果が認められる「絵本の読み聞かせ」については近年国際的に再評価されている。田島信元・佐々木丈夫・宮下孝弘・秋田喜代美^{viii}は心理学的アプローチから、ヴィゴツキー、トマセロ、ブルーナー、コールの各理論から以下の分析を行っている。

(1) ヴィゴツキー^{ix}の支援理論

子どもの発達とは、おとなの文化活動をおとなとの共同作業を通して獲得していく過程としてとらえる理論。未経験の子どもは、おとなとの社会的相互交渉により、おとなとの共同作業を行いながら、環境の獲得活動をする。その結果、精神的に達成すると自分自身の内面に引き込み、おとな

との共同作業そのものを自分の内面でおこなうようになる。ヴィゴツキーの「最近接発達領域」の視点から見ると、子どもは現時点より「少しだけ高度なレベル」の領域に働きかけることを意味している。

（2）トマセロ⁸の文化的認知発達理論

トマセロは、人間との遺伝子一致率が高いチンパンジーとの比較を通して、「発達＝文化獲得」が人間独自の能力と考えている。その理由として、人間のみ特別な模倣学習能力があり、指さし革命が起こる9か月頃から相手の行動の意図を読み取り、コミュニケーションしながら学習する模倣能力がみられことを指摘している（＝「模倣学習」）これは、この時期にはじまる三項関係を通して、周囲のおとなと共同注視することにより、チンパンジーと異なり、模倣学習が可能になる。

（3）ブルーナー^{xi}の実証的知見

子どもの言語獲得が生来の能力と認めつつ、その作動は「言語獲得支援システム」が必須であることを語りかけや読み聞かせによって実証的に証明した。

（4）コール^{xii}の仮説モデル

ヴィゴツキー理論に従って、読み聞かせや読書が子どもの文化的発達の根幹となると説いたコールは、「共同注視としての読み聞かせ」が継続的に内面化し、リテラシーが獲得されていく」と説明している。コールの「言語や文字等の文化活動を根幹に、その獲得が「親子の相互行為に基盤がある」という主張は、本論の1歳から3歳における「絵本の読み聞かせ」がいかに子どもの発達にとって理にかなった方法であることを示唆している。

3. 「絵本の読み聞かせ」文化活動

第二次世界大戦後には、家庭文庫という日本独自の文化活動が日本全体に普及した。最初に家庭を開放して子どもに読書の場を与えたのは村岡花子であるが、その後、石井桃子や松岡享子、土屋滋子が開始した文庫活動は、財団法人東京子ども図書館としての読書啓発の啓蒙活動へと開花して

いく。汐崎順子^{xiii}によると、1993年の大規模調査では、1951年頃から始まった家庭文庫であるが、最盛期には日本全国に約4000件の家庭が子どもたちに小さな図書館として開放されていたのである。石井の『子どもの図書館』^{xiv}の影響により、こうした活動は日本の母親を中心に子どもへの読書活動を目覚めさせ、読み聞かせ文化を習慣づけ、定着させていった。

4. 1歳から3歳児の言語認知能力

こうした先行研究に鑑み、「絵本の読み聞かせ」に辿り着くまでの子どもの言葉の発達過程に目を向けると、乳児は平均して、1歳の誕生日前後に「マンマ」や「ブーブー」という日本語を覚え、初めての言葉である初語を発音することができる。1歳後半には、それまで1カ月に3～5語程度であった語彙の増加は、月30～50語の勢いで増え、その後、約10倍のスピードで爆発的な勢いで増加していく。

言語について全く知識のない乳児はどのように言語を学ぶのであろうか。針生悦子^{xv}は、乳児は「とにかくに与えられた言語に取り組み、自分でいろいろ発見していかなければなりません」と述べている。初語出現の以前に、9カ月頃の乳児の指さしが言語の役割を果たすことはわかっているが、羽生は指さしの方法がうまくいくためには、一つ目に「教えられる側も、話し手の声を、話し手が示すモノと関連づけ」という乳児側の意図の存在の必要性を示し、二つ目に「モノには名前があることも理解」が不可欠であると指摘する。

確かに、視覚と聴覚を病で失ったヘレン・ケラー^{xvi}が、サリバンから、井戸端で片手に水をかけられながら、「water」と綴られ、モノには名前があると気づくエピソードはあまりに有名である。この時以降、ヘレン・ケラーの言語獲得は爆発的に増加していく。誕生後一年間、乳児がほとんど何も話さないのは、咽頭や口腔の構造が話するのにまだ適していない未分化の状態であるという理由だけではなさそうである。しかし、乳児は胎内にいる間からも、着実に言葉を学んでいることは推測できる。

乳児の能力を調べる「馴化・脱馴化法」^{xvii}という実験では、妊娠期最後に母親が毎日声に出して読んでいた物語の方を、聞いたことのない物語より好んで聞きたがるのがわかっている。9カ月革命といわれる指さし行動は、それまでの二項関係が三項関係へと発達し、モノと向き合いながら、周囲のおとなへの社会的参照で物事を判断していく。言語の学習においても、相手が言った言語の意味を相手の気持ちや指さしや視線を手がかりに汲み取っていく。たとえば、母親が犬を指さしながら、「ワンワン」と言った言葉が、動物のことなのか、毛がはえて四つ足の白くてふわふわしたものを意味するのか、逡巡する。したがって、「ワンワン」の意味する範疇が乳児によって狭義的な「犬」に辿りつくまでには、かなりの個人差が生じているのである。

5. 1歳から3歳児と絵本

言語をもたない乳児は、やがて日常生活で交わされる身近なおとなとのコミュニケーションにより、新しく語彙を獲得し、1歳過ぎる頃には初語が表れ、徐々に二語文、多語文へと発展し、小学校就学前までにはほとんどの日常会話を聞き、話す能力が身につけている。

しかし、絵本環境に身を置く子どもは、より多くの言語を獲得する可能性を持っている。なぜなら、日常で経験以外の冒険や挑戦を、絵本の世界に自分も同化しながら体験していることになるからだ。言語活動も日常の枠を越え、絵本世界における言語が子どもと子どもが安心できるおとなの共有世界となる。

絵本のジャンルは多岐を極め、個々の絵本の言葉がどのように子どもの言語発達に影響していくかは別の機会を待たなければならない程、膨大な課題がある。しかし、本研究では、1歳から3歳児が主体的に身近なおとなに読み聞かせをせがむ絵本を中心に、記録、分析を行った。次章では、エスノグラフィー法により、収集した事例を公開していく。事例では、字の読めない1歳から3歳児が何度か読み聞かせされた絵本の文章をスラス

ラと暗唱していく様子が記録されている。

第2章 事例研究

1. 研究法

- (1) 研究目的：絵本の読み聞かせを親子が共有することにより、子どもがどのように言語を模倣し、獲得していくかを記録し、その過程を分析し、絵本の読み聞かせと言語獲得との関連を究明していく。
- (2) 研究方法：エスノグラフィー法—人間社会や集団社会の文化・生活様式そのものを研究対象とし、それらを深くとらえるために行う行動観察法で、質的研究法の一つ。
- (3) エスノグラフィーの特徴
 - ①持続的で関与的な手法であること：子どもの生活に参加しながら持続的に観察することによって、意味の創出／変革過程としての発達過程を理解するうえで重要なできごとを記録することができる。
 - ②微視的かつ全体的な手法であること：行為を詳細に記録するだけでなく、行為をより大きな意味（社会・文化的な意味）に位置つけることによって、行為に込められた文化的意味を知ることができる。
 - ③柔軟で自己修正的な手法であること：データ収集とデータ分析を並行してすすめることによって、研究設問やデータ収集法をフィールドの状況に適合したものに修正できる。
- (4) 研究期間：2018年4月～2020年7月
- (5) 研究対象：関東圏在住の親子 1歳児～3歳児 6名
- (6) 研究場所：対象者の自宅
- (7) 研究方法：録音、動画撮影により、子どもの言語活動を記録する。
- (8) 個人情報保護：研究前に「インフォームド・コンセンツ」を示し、研究内容を説明し、承諾を得る。
- (9) 研究内容：本研究では、1, 2歳児には絵本内容の統一を図るため、インタビューにより、より対象児が好んでいる林明子の赤ちゃん絵本を読み聞かせの絵本を対象とした。3歳児には、センダックの作

品を好んだ子どもが多く、その他、日常に繰り返し読まれた絵本の言葉の発語も収集した。

2. 事例AからE

事例Aでは、研究対象の親子が絵本の読み聞かせを行いながら、交互に読み合っている様子を記録した。対象の子どもは文字が読めず暗記している言語を発している。

(1) 事例Aの記録

①事例Aの研究方法

* 対象児：K児（2歳6か月・女児）

* 場所：K児の自宅（世田谷区）

* 日時：2020年5月

図1：林明子『おでかけのまえに』

* 対象：K児（=K）及びK児の母親（=母）

* 方法：ビデオ撮影及び音声記録

親子で絵本『おでかけのまえに』^{xviii}（福音館書店）を介して相互に読み合う様子を記録した。

『おでかけのまえに』2歳6か月（動画・録音）

②事例Aの内容

表1：事例A『おでかけのまえに』親子の読み合いのプロトコル（下線は絵本文と一致）

* プロトコル 事例①

「ばんざい はれた きょうはピクニックに行くひです」(K)

「だいどころでは」(母)

「おかあさんがおべんとうづくりのまっさいちゅうです」(K)

「テーブルのうえには」(母)

「たくさんのごちそうがいっぱいのっています」「たべてもいい?」「だめだめ」

「ピクニックに」(K)

「いってから」(母)

「テーブルのすみで」(母)

「あさごはんをたべながら」(K)「あやこはいいことをおもいつきました」(K)

「おかあさん、みて、わたし」(母)

「おべんとうをつくってあげたの」(K)



「まあ、おかあさんはびっくり あやこは」(母)
「ばじゃまで、ばじゃまでてをふいていいました」(K)
「おとうさんに」(母)
「おしえてくるね」(K)
「「すごいね、読むのひさしぶりなのにね」(母))
「おとうさんは」(母)
「まだひげをそっています」(K)
「おとうさんのバッグは」(母)
「まだあけっぱなし」(K)
「そうだ、このバッグ」(母)
「しめてあげよつと」(K)
「あやこはチャックを」(母)
「しめようとし」(K)
「しめようとしましたが」(母)
「ひもがじゃまになります」「ひもをひっぱりました」(K)
「おとうさん」(母)
「バッグがパンクしちゃった」(K)
「おやおや あとは」(母)
「おとうさんがやろう」(K)
「あやこは」(母)
「きがえなさい」(K)
「おかあさんがあやこの」(母)
「いちばんすきなふくをきさせてくれました」(K)
「もうでかける?」(母)
「ここでまっ待ってね」(K)
「おてつだいは」(母)
「もうけっこうよ」(K)
「あやこは」「かがみのいっしゅうかん」
「もつと」(母)
「きれいにちよつと」「わたしきれい?」(K)
「おかあさんはあやこのかおを」(母)
「ごしごしふきました」(K)
「くつをしなさい。」(K)「もうでかける」(K)
「あと」(母)
「ごふん」(K)
「あやこは」(母)「あやこはまちきれません」(母)
「まちきれません」(K)
「いそいで」(母)
「しよとにで、でした」(K)

(ここ覚えてるでしょ (母))
「おかあさん、ころんじゃった」(K) (しゅぐころんじゃうねえ)
「さあ」(母)
「ちゅっぱつ」(K) 「ばんざい、ピクニック！」(K)
「あやこは」(母)
「あやこはとんでんいます」(K) おしまい

考察

③事例Aの考察

事例①の表①に示した絵本『おでかけのまえに』のK児のプロトコルの中で、下線を引いた部分が、福音館書店出版の絵本の文章と一致した箇所である。ほとんどの文章を暗記していることがわかる。K児は、1歳以前から、多くの絵本の読み聞かせを母子で共有してきた経緯があり、この絵本に関しても繰り返し、20回以上は読んでもらったの結果である。K児の言語発達は比較的早く、初語は1歳1カ月であったが、1歳3カ月には2語文、1歳6か月には多語文を話している。現在は、2才9月であるが、発音が不明瞭ではあるが、名詞、形容詞はもとより、接続詞、副詞、動詞の語彙も数多く話の中で駆使している。例えば、この絵本の中で「あやこはいいことをおもいつきました」「おべんとうをつくってあげたの」「いちばんすきなふくをきさせてくれました」という文章があるが、K児は日常会話の中で、「…いいことおもいついた」、「…をつくってあげるね」「パジャマをきせてくれたの」等々、絵本で表現されている文章を活用していることが散見されている。

加えてK児の母親からのインタビューで次のようにK児と絵本について語っている。

私が絵本好きだったこともあり、K児は生後1カ月から絵本と触れ合っており、今はお昼寝前と毎晩寝る前に必ず絵本を読んでもらうことを楽しみにしています。その時々でお気に入りの絵本は違いますが、執着する絵本は毎晩何度も繰り返し読みたがります。いつのまにか『おでかけのまえに』や『おじいちゃんとおばあちゃん』

(ブルーナ、福音館書店)は文章を丸暗記してひとりで読み出した時は驚きました。図書館や児童館にはよく足を運び、「おはなし会」にも参加しています。日常生活でも絵本のセリフの真似をしたり、登場人物になりきって行動することがよくあります。例えば『なつみはなんにでもなれる』(ヨシタケシンスケ、PHP研究所)では自分の名前に置き換えてなつみの行動の真似をして遊んでいます。

(2) 事例Bの記録

事例Bでは、R児がほとんど一人で暗唱している文章が記録されている。

①事例Bの研究方法

- * 対象児：R児（3歳7か月・女兒）
- * 場所：R児の自宅（茨城県）
- * 日時：2019年10月
- * 対象：R児及び母親
- * 記録方法：ビデオ撮影及び音声記録



図2：『かいじゅうたちのいるところ』

親子で絵本『かいじゅうたちのいるところ』^{xix}R児が読む場面を記録した。

『かいじゅうたちのいるところ』3歳7か月（録音）

②事例Bの内容

表2：事例B『かいじゅうたちのいるところ』R児のプロトコル（下線は絵本の本文と一致した文章）

「あるばん マックスはおおかみになって <u>いたずらをして</u> 」(R)
「 <u>おおあばれ</u> 」(R)
「 <u>おかあさんは 『このかいじゅう!』</u> といった。マックスも『 <u>おまえをたべちゃうぞー!</u> 』というとき <u>しんしつにほうりこめられた</u> 」(R)
「 <u>によきり</u> <u>によきりときがはえて</u> 」(R)
「 <u>どんどんはえて</u> 」(R)
「 <u>もつともつとはえて</u> <u>もりになった</u> 」(R)
「マックスはふねにのって <u>こうかいした</u> 」(R)
「 <u>1しゅうかんすぎ</u> <u>ふたつきふたつきひがたって</u> <u>1ねんかんこうかいすると</u> <u>かいじゅうたちのいるところ</u> 」(R)

「かいじゅうは すごいこえで うおーっとほえて すごいはをがちがちならして」(R・吠える真似と歯をガチガチ鳴らしながら)

「すごいめだまをぎよろぎよろさせて すごいつめをむきだした」(R・爪を立てる真似)

「マックスは『しずかにしろ!』といって まほうをつかった」(R)

「こんなかいじゅうみたことないとみんなはいった。」(R)

「『みなのものー』といってかいじゅうたちはおうさまにした」(R)

「『もう やめー』マックスはさげんだ。とうとうマックスはごはんなしできょうりゅうをねむらせた。やさしいだれかさんのところにいきたくなってきた。」(R)

「そのとき むこうのせかいから いいにおいがながれてきた。 おうちにもうかえりたくなっちゃった。」(R)

「マックスは さっさとふねにのって『またねー』ってなった。」(R)

「『んもー』ってないて おおきいはをがちがちならして 『いかないで おまえたちは たべちゃうほどおまえがすきなんだ。 たべてやるからいかないで」

『そんなのやだー』といってマックスはさっさとふねにのって『またねー』とした。」(R)

「1しゅうかんすぎ ふたつきふたつきひがたつて 1ねんかんこうかいするともういつのまにかほうりこまれたじぶんのへや。」(R)

「そこには ごはんも ちゃんと ゆうごはんが おいてあつて」(R)

「まだぼかぼかとあたたかかった。」(R)

③事例Bの考察

R児の場合、3歳7カ月で『かいじゅうたちのいるところ』という比較的長い文章を覚え、一人でほとんど正確に暗唱する結果となっている。以下は、R児の家庭での言語環境や言語発達に関する母親へのインタビューである。

R児は母親が出産直後から意識して「ママだよ」と声をかけ続けたこともあり、初語は7ヶ月の時に「ママ」だった。2語文は1歳2ヶ月で「パパねんね」であり、寝るポーズと共に口にするようになった。2歳の誕生日の頃には出かけるときに「ママ、もしもし（携帯電話）もった？忘れちゃダメでしょ！」と発言していると母子手帳に記録がある。

生後3ヶ月頃から絵本に触れており、飛び出す絵本や仕掛け絵本から慣れ始め、1

歳前にはお気に入りの絵本を自分で持ってきて読んで欲しいとおねだりする様子も見られた。

R児の母親は保育士資格を有し、特に子育てにおける絵本環境に力を注いでいる。家での絵本蔵書は40冊以上あり、R児がいつでも手に取れる棚に収納している。また、寝る前の習慣として、毎晩2冊は読み聞かせている。このように絵本がすぐ子どもの手に届く所にあり、また、好きな絵本を毎日読んでもらえる家庭環境が、表2の事例Bのような言語能力を育てていったと考えられる。

次に、絵本の文章を暗唱する能力のみならず、R児が2歳の時に記録した事例Cは絵本の文章を日常において応用する力が育成されている例である。

(3) 事例Cの記録

①事例Cの研究方法

- * 対象児：R児（2歳0ヶ月・女児）
- * 場所：R児の保育園からの帰り道(茨城県)
- * 日時：2018年3月
- * 対象：R児（=R）及びR児の母親（=母）
- * 方法：ビデオ撮影及び音声記録



図3：『おつきさまこんばんは』

保育園の帰り道、お月様を見上げながら親子で交わした会話を記録した。

②事例Cの内容

表3：保育園の帰り道にお月様を見つけて R児のプロトコル

「ママ！おちゆきしゃま！おちゆきしゃま、こんばんは～！！」（R）
「よるになったよ ほら おそらが」（母）「くらい くら～い！」（R）
「おや？やねの上が？」（母）「あかるくなったー！」（R）
「おつきさまだー！」（母）
「おちゆきしゃま こんばんは～！！」（R）
「だめだめくもさん」（母）「こないでー！ないちゃう～！」（R）

「くもさん どいて～。おつきさまのおかおが」（母）「みえな～い！」（R）
 「ごめん ごめん ちょっとおつきさまとおはなししてたんだ では さようなら」（母）
 「あ～よかった おつきさまが わらってる」（母）
 「まま！まんまるちがったー！（三日月）ねちゃったー。」（R）
 「そっか！寝ちゃったのか！挨拶してみる？」（母）「こんばんは～！！！」（R・母）
 「おきないね～！」（R）

表4：『おつきさまこんばんは』[※]本文

よるになったよ ほら おそらが くらい くらい
 おや やねのうえが あかるくなった おつきさまだ おつきさま こんばんは
 だめ だめ くもさん こないで こないで おつきさまが ないちゃう
 くもさん どいて おつきさまの おかおが みえない
 ごめん ごめん ちょっと おつきさまと おはなし してたんだ
 では さようなら また こんど あー よかった おつきさまが わらってる
 まんまる おつきさま こんばんは こんばんは

③事例Cの考察

この会話は、明らかに林明子の『おつきさまこんばんは』の内容が下敷きとなっている。比較するために本文を表4として付記するが、何度となく読み聞かせを受けた絵本の言葉をこの会話では踏襲している。『おつきさまこんばんは』はブックスタートで住んでいる地域で配布されている本の中の1冊であり、生後5ヶ月頃から慣れ親しんでいた本であったという。この撮影時の月の形は絵本の絵と異なり、三日月であったため、R児は月が「寝ている」と解釈している。このことから文章と絵の両方を覚えているだけでなく、記憶を辿りながら自分なりに解釈する力や想像力もあると言える。インタビューでは、母親はこの場面について次のように説明している。

三日月を見て、お月さまが寝ちゃったと思っている2歳児との会話です。

毎日のように読んでいて親子で絵本を暗記していた頃です。

現在は4歳4ヶ月になり、少しずつ字を書くことにも興味を持ち始めています。いわゆる早期教育の「塾」には通っていませんが、いくつかの平仮名(「あ」「え」「く」「こ」「な」「ま」「は」「ら」)は読み書きができます。絵本の中で読める文字を見つけると教えてくれるようになりましたが、文章として読める力はまだありません。絵本は現在でも好きで、毎日遊びの合間や寝る前等、Rのタイミングで1日2冊～5冊程度読んでいます。言葉に関しては知っている名詞の数も増え、しりとり遊びが好きです。また、これまでの乳幼児健康審査等において発達で指摘を受けたことはありません。

(4) 事例D

①事例Dの研究手法

- * 対象：O児（1歳4ヶ月・女兒）及び母親
- * 場所：O児の自宅（茨城県）
- * 日時：2020年8月
- * 対象：O児（=O）及び母親（=母）
- * 方法：ビデオ撮影及び音声記録



図4：『だるまさんが』

母親が絵本『だるまさんが』^{xxi}（2008）を読み聞かせる様子を記録した。

②事例Dの記録内容

表5：事例D『だるまさんが』親子の読み聞かせプロトコル

「だるまさんが」(母)
(Oが体を傾ける真似をする)
「どてっ！ できたね！上手、上手！」(母)
「だるまさんが」(母)
「おしゅーっ」(母・体を小さくする)
「だるまさんが」(母)
(Kが鼻を摘みながら)「ぶっ！」(O)
「ぶっ。臭い臭いだね～！」(母)
「だるまさんが」(母)
(Oが万歳をする)
「びろーん！できたね～！」(母)
「だるまさんが」(母)
(Oが人差し指を頬に当てて笑顔を作る)
「にこっ！できたね～！可愛い可愛い！」(母)

③事例Dの考察

事例Dでは、まだ1歳4カ月の事例であり、初語が出てまもない時期であるが、絵本の内容を体で表現していることが記録されている。O児は1歳2ヶ月頃から少しずつ『だるまさん』シリーズを気に入り始め、自ら本を母親の元へ持ってくるようになった。1日に数回読むことがあり、『だるまさん』シリーズは3作品あるが、その中でも『だるまさんが』を特に気に入っており、毎日必ず数回O児自身が読んで欲しいと訴える。

O児の初語は7ヶ月に「ママ」と言い、その後1歳3ヶ月頃から特に言葉が増え、1歳4ヶ月では20以上の言葉を話す、二語文はまだである。自分で絵本を持ってきて読んで欲しいと頼む仕草や、絵本の内容を口にした、絵を真似た動きをすることから、1歳4ヶ月でも絵本の内容を覚え、母親と言葉や体で表現することを楽しむことができることがわかる。母親へのインタビューでは、「また、服を脱ぐときなど、Oに両手をあげて欲しいときは『万歳して』と声をかけるよりも『びろーん』と声をかけるとOは両手を上げます。」とある。このことから1歳児でも絵本で見聞きしたことを記憶し、絵本が手元になくとも生活習慣の中で思い出すことができることがわかる。

（5）事例E

①事例Eの研究方法

- * 対象：A児（1歳11カ月 男児）
- * 場所：A児の自宅近所(東京都杉並区)
- * 日時：2020年4月5日
- * 方法：ビデオ撮影及び音声記録



母親が絵本『ふたぶたくんのおかいもの』^{xxii}を何度も読み聞かせた後の記録である。

②事例Eの記録内容

表6：事例EのA児の絵本による言語発達についての母親へのインタビュー記録

長男（4歳）が物語性のあるストーリー性のある長い絵本が好きのため、弟のA児は、いつも絵本を読んでいるそばにいます。1歳児であっても、長い絵本のフレーズを吸収しているようです。好きな絵本は以下となります。

- ①『ぶたぶたくんのおかいもの』（土方久功作・絵、福音館書店）
- ②『まよなかのだいどころ』（モーリス・センダック作、じんぐうてるお訳、富山房）
- ③『おやすみなさい おつきさま』（マーガレット・ワイズ・ブラウン作、クレメント・ハード絵、せたていじ訳、評論社）
- ④『でんしゃはうたう』（三宮麻由子文、みねおみつ絵、福音館書店）
- ⑤『カンカンカンでんしゃがくるよ』（津田光郎文・絵、新日本出版社）
- ⑥『おやおや、おやさい』（石津ちひろ文、山村浩二絵、福音館書店）
- ⑦『おまえうまそうだな』（宮西達也作・絵、ポプラ社）

などです。

どれも必ず「もう1回読んで」と言って、5回連続で繰り返し読んだり、毎日毎日同じ絵本を持ってきたりする、お気に入りの絵本です。

昨夜も『でんしゃはうたう』を読んで寝たのに、今朝起きてきてすぐにまた「読んで～」と持ってきました。

必ずしも豊かな言語の獲得、難しい用語を話す、というようなわかりやすい形での表現ではないのですが、彼の中に、それぞれの絵本の世界が確かにあると思います。

家の近くに「ぶた公園」という公園があり、「今日はぶた公園に行こう」と言って歩き出すと、歩きながら「ぶたぶたかあこお、ぶたぶたかあこお、くまくまど たじたどたあんばたん」と、本に出てくるフレーズを口ずさみながら、絵本に出てくるぶたぶたくんとかあちゃんが歩いていたように、自分も楽しそうに歩いています。

「ぶた」という単語を耳にただけで、いつでもすぐに「ぶたぶたかあこお…」が始まります。

③事例Eの考察

0歳の頃からいろいろな絵本を読んで楽しんできA児の場合、4歳の兄の影響も大きい可能性があるが、A児の母親は出版社勤務であり、絵本環境は特に充実している。『ぶたぶたくんのおかいもの』の啓発された「ぶた」という言葉が気に入り、頻繁に口ずさむ様子が記録されている。

第3章 「絵本の読み聞かせ」による1歳から3歳児の言語獲得

1. 「絵本の読み聞かせ」の特性

第2章では、事例AからEまで、1歳から3歳児が絵本から言葉を吸収し、暗唱して自分の言語として身に付けたり、日常生活でその言葉を活用したり、楽しんだりしている事例を紹介した。「絵本の読み聞かせ」が、1歳から3歳までの間に着実に個々の子どもの言葉の発達に影響していることがわかる。では、「絵本の読み聞かせ」がなぜこのように子どもの言語発達に影響を与えているか、どのような特性があるのかを説いていきたい。

親子の親密な読み聞かせが定着した理由の根幹には、1歳から3歳児でも、絵本を繰り返し読んでもらいたがり、その度重なる行動におとなが呼応し、子どもの共有時間として習慣化することを誘引していると考えられる。その要因として二つの理由が存在する。一つは絵本そのものがその子どもにとって、興味深い内容や絵や言葉を有しており、何度も読んで咀嚼したい衝動に駆られるから。二つ目は、絵本を共有する身近なおとなとの時間やスキンシップを楽しみたいからである。

無藤隆は、絵本の読み聞かせという子育て習慣がこの半世紀の間に日本に定着し、商業主義的出版物が親子の親密な空間・時間に入り込んだと指摘している。無藤^{xxiii}は絵本学会講演会「乳幼児に読み聞かせるものとしての絵本とは何か」において、絵本独自の特性を以下の7つの項目に整理している。筆者の解釈をつけ加えながら解説したい。

(1) 共同注意としての絵本

共同注意とは、0才の終わりには成立する行為であるが、おとなと子どもが同じものを見てそれを了解している状態である。絵本は子ども自身の視覚的に絵の刺激が連なるが、聴覚的に親からの音声の解説が入る。子どもは、親の膝の上、或いは布団の横に位置し、絵本のページに描かれた絵に集中する。静止した絵への集中力は長くは続かないはずだが、親が読む

声の変化が注意を持続させ、言葉の理解が進むにつれて、絵への探索の指示ともなる。子どもにとって、聞き慣れた親の声により、情緒的な安定感が生れ、より楽しい共有時間となる。

(2) 命名ゲームとしての絵本

1歳半ばから2歳にかけて、モノには名前があると認知する「命名期」に入る。この時期の絵本は、ディック・ブルーナの絵本に象徴されるような文脈や背景が単純である。親が指さした絵の名前（ラベル）を子どもが似た発音を模倣する。繰り返すうちに、子どもが主体的に指さして、ラベル化が進展していく。

(3) 繰り返し構造

子どもは、同じ絵本を毎日繰り返し読んでもらおうとする。元来、未経験な状態に置かれてい子どもは、自分が経験した既知の世界を楽しむ。ページをめくるその先が予測可能であることを確かめ、絵本の世界を安定的にとらえる。未知の世界が多い毎日の中で、先が予測できることにより安心する。繰り返すことにより、新たな発見をも楽しんでいる。

(4) スクリプト型

物語絵本には、日常生活のスクリプト（決まり切った出来事の連なり）に基づく構造を持つものが多い。「はじまりー真ん中ーおわり」の一連の出来事の連鎖が、時間の流れとともに展開され、絵もついても、時間に併せて横開きであれば、左から右へと広がっていく。

(5) 物語絵本と日常

物語絵本の多くは、目標が明示され、異世界への旅や散歩が、筋とともに展開される。その間、仲間との出会い、葛藤、援助、困難の克服、謎の解明等々の出来事を経て、必ず帰還する構造をもつ。ごっこ遊びの構造と酷似している。瀬田貞二は『幼い子の文学』^{xxiv}で、「行って帰る物語」が幼い子どもには適していると述べている。この構造は、ごっこ遊びに酷似しており、絵本から発生する遊びが数多く報告されている。

(6) 図鑑と絵本との関連

物語絵本の中には、図鑑的要素を持つものも多い。たとえば、『ちいさなちょうぼうじどうしゃ』^{xxv}（レンスキー）では、消防自動車の機器の名前、使い方、出動の手順、火災の消火法、救助法が丁寧に示される。物語の時間とともに展開されるストーリーに付随した図鑑的知識がより深く子どもの認識を広げていく。

（7）言葉遊びとしての絵本

言葉遊び絵本は、なぞなぞや詩、ダジャレや逆さ言葉等、言葉自体を楽しむことを提案する。子どもは、絵本を離れて、言葉の世界を回りと共有しながら、言葉の面白さを発見していく。

以上、7つの「絵本の読み聞かせ」の特性のうち、（1）から（3）の3点の要素に絞り考察していきたい。

2. 共同注意と言語的シンボルの共有

（1）「共同注意としての絵本」については、前述したように愛着形成の過程で、親との絵本の読み聞かせ行為は、共同注意によって、より親との関係を身近に感じ、声や肌とともに至福の時間として認識できるからであろう。

子どもは言語的シンボルをどのような場面で獲得し始めるのだろうか。Ninio & Bruner^{xxvi}は、1組の母親と子どもの本読み場面を生後8～18か月まで追跡している。大藪葵^{xxvii}は、『共同注意－新生児から2歳6か月までの発達過程』の中でこの研究について次のように述べている。

この観察記述には、観察を始めた直後から、フォーマットと言われる手順の決まった非言語的な対話と明確な役割交換替構造が見られる。子どもが指さしをして発声すると、母親がその絵の名前を言い、子どもはそれで納得する。母親が名前を言うと、絵を子どもが指さしで示す。すると母親はその反応を是認する。こうしたシーンで子どもが言葉を発することはない。しかしそこには、母親の発する言葉を理解した応答行動が見られ、言葉でのやり取りと同様に円滑な役割交替が生じている。

さらに月齢が進むと、絵を指さしや発声で示すのではなく、母親が言っていた名前を覚えて、自分からその名前を言うようになる。また母親から尋ねられて絵の名前を答えたり、母親に絵の名前を言わせようとしたりする役割も取れるようになる。

大藪は、この場面で重要な点は二つあることを指摘している。第一に、「母親はある指示対象を特定の語によって繰り返し指し示していること。」第二に、「子どもと母親がこの場面を絵本場面として意味づけ、コンテクストを相互に共有し合っていることである。」

事例AからEで、母親と共有した絵本が各々絵本場面として意味づけられており、特に共有した記憶のある母親との時間にその言葉が発揚されている。

3. 命名期と絵本

命名期には、(2)の命名ゲームとして代表的な『くだもの』^{xxviii}(平山和子、福音館書店)という絵本を乳児に見せながら、絵本のページ描かれた「ばなな」の名前を「ばなな」と指さす。実際にはばななを食べたことのある乳児であれば、ばななの味を思い出しながら、「バァニャニャ」その単語を繰り返す。ページをめくるたびに現れるくだもの名前を、ページをめくりながら延々と繰り返していく。2歳の時期は、言葉の名前を覚える命名期といわれる。物語に入る前には、こうしたモノの名前が事典風に描かれた絵本を繰り返し、読んでもらいたがる。かつて、筆者の長女が2歳前後の頃、『しろ、あか、きいろ』^{xxix}「わたしのしゃつはしろ、すかーとはあか」と衣服の色と名前を羅列した絵本を毎日繰り返し読むことを要求し、少なくとも100回近く読まされていた。



図6：『くだもの』 図7：『しろ、あか、きいろ』

4. 繰り返し構造

「繰り返し構造」について、繰り返しを求める行為自身が、子どもが主体的であることを明示している。子どもが親やおとなから日々指導され受動的に行動することが多い中、絵本に向かう時、子どもは自ら主体的に関わる姿勢を崩さない。音声を聞かせ、黙って聞く子どもの読み聞かせ場面が、一見受動的に映る反面、子どもは視覚的、内面的に主体的に絵本に参与している。その証拠に受動的な行為に対して、子どもは決して繰り返しを要求しないからである。

前述した大藪^{xxx}は、「おとなが、ある指示対象を示す言語的シンボルを一度だけしか使わず、再び語られることがないなら、子どもにはその語を学習することは不可能である。繰り返しが必要だからである。」と述べている。

第4章 まとめ

第1章では、先行研究から、心理学的見地からも、脳科学の分析からも「読み聞かせ」が子どものリテラシー能力に多大な影響があることが説いた。こうした研究は3歳児以上を対象としたものであり、1歳から3歳児を対象に行われたものではない。しかし、生理的早産であるヒトの子どもは、ごく早い時期から直接の養育者であることが多い母親や父親との愛着関係を求めており、その一つ的手段として「絵本の読み聞かせ」は育児習慣にしやすい環境である。このことは多くの保育園、幼稚園における保育内容でも、子育て支援事業においても「絵本の読み聞かせ」を実践していることからもうかがえる。

第2章では、実際に家庭で「読み聞かせ」を習慣とする3組の家庭における1歳から3歳児がどのように絵本を母親と共有し、またその活動を通して言葉を獲得し、その言葉を実用化していく5つの事例を紹介した。第3章では、「絵本の読み聞かせ」の中から「共同注意」「命名期」「繰り返し構造」についてさらに考察を深めた。

各々の事例の考察でも述べてきたが、1歳から3歳児ならではの絵本の関わりがあぶりだされたように思う。まだ言語を覚えての1歳から3歳児は、「絵本の読み聞かせ」を母子で習慣化しながら頻繁に共有することによって、絵本の文章を咀嚼し、模倣し、自分の言葉として脳裏に刻み込む能力を有している。「絵本の読み聞かせ」が、言葉への興味関心を高めるだけでなく、子どもの言葉の基礎を作り、その後の個々のリテラシー能力を高めていく可能性は大きい。しかし、この過程は決して子どもひとりでは起こしえない。ヴィゴツキーが指摘したように人生に未経験の子どもは、手始めにおとなの文化活動をおとなとの共同作業を通して獲得していく。また、トマセロのチンパンジーとの比較からヒトの乳幼児期には優れた「模倣学習」がみられる説とも一致している。ブルーナーは、おとなの「言語獲得支援システム」の必要性を説き、コールは親子の相互行為に基盤がある「絵本を読み聞かせ」を絶賛した。

大好きなおとなの存在・そのおとなとの絵本の共有、子どもへの支援—この3つのおとなからの働きかけも子どものリテラシー発達の大きな要因であることを忘れてはならない。このことが子どもにとってどれ程のその後の人生の力となりうるか計り知れない。

しかし、現場に目を向けてみると、幼児教育、保育において、「絵本の読み聞かせ」は日常的な日課となっている所がほとんどであるが、絵本にこれだけの力があることについてはまだまだ認識されていないのが現状であろう。また、家庭においても、デジタル化やIT産業の隆盛の中、1歳から3歳児の子育てにメディア環境を安易に取り入れている現状も否めない。しかし、この時期にしかできない親子の「絵本の読み聞かせ」のふれあいこそ、子どもの言語発達、親子関係、読書関係、リテラシー学習のよりよい今後につながっていくことを発信する必要がある。地域との連携において子育て支援にも貢献できる絵本の力をさらに発信し、研究を継続していきたいと考えている。

本研究では、3組の親子を縦断的に行ったが、今後もより長い期間を縦

断的に継続し、多くの親子を対象にした横断的研究も急務であろう。また、家庭と地域との連携においても、「絵本の読み聞かせ」を推進していくことが重要な課題であると考えている。

謝礼：お忙しい時間の中、本研究にご協力くださった3組の親子に深く感謝の意を表したい。

〈注釈及び引用文献〉

- i 柴山真琴、「発達研究におけるエスノグラフィー：社会的営みとしての発達を理解する方法」、『事例から学ぶ質的研究法』、東京図書、2007
文化人類学の研究に象徴されるように、人間社会や集団社会の文化・生活様式そのものを研究対象とし、それらを深くとらえるために行う行動観察法で、質的研究法の一つ。P53
エスノグラフィーは、長期にわたり対象者の日常生活に関わり、関心のあるテーマを解明するために、入手できるデータはどのようなものでも集めるのが基本姿勢とされる。文化や日常生活のなかの社会的規則性に焦点を当てるものであり、結果的に豊で厚みのある記述としてまとめやすい。その方法は、あらゆる情報・観察結果の概念的・理論的な意味についてはとらわれずに、それらを整理し、意味を見出すことである。
- ii Mullis, I. V. S., M. O. Martin, E. J. Gonzales and A. M. Kennedy (2003), PIRLS 2001 International Report ; *IEA's Study of Reading Literacy Achievement in Primary Schools*, Chestnut Hill, M A.
この調査が正の相関があったとしている親子活動とは、以下のようなものである。本を読み聞かせること、物語を語り聞かせること、歌をうたうこと、アルファベット文字のついているおもちゃ（例：ABCの書かれたブロックなど）で遊ぶこと、言葉遊びをすること、看板の文字やラベルを読むこと。また別の研究からは、日常生活のなかで親子一緒に行う活動の頻度が最も高いグループの子どもたちは、頻度の低い子どもたちより読解力の成績が優れて良いこともわかっている（Mullis et al. 2003, 2007）（pp.242-3、OECD編著、『OECD保育の質向上白書 人生の始まりこそ力強く：ECBCのツールボックス』、秋田喜代美他訳、明石書店、2019）
- iii pp.242-3、OECD編著、『OECD保育の質向上白書 人生の始まりこそ力強く：ECBCのツールボックス』、秋田喜代美他訳、明石書店、2019
- iv Pp.150-159、齋藤有、内田伸子、「幼児期の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響：「共有型」と「強制型」の横断的比較」、『発達心理学研究2013. 第24巻、第2号』
- v Pp.89-100、森慶子、「『絵本の読み聞かせ』の効果の脳科学的分析－NIRSによる黙読時、音読時との比較・分析－」、『読書科学 第56巻 第2号』2014. 12

- vi 秦羅雅登、『読み聞かせは心の脳に届く』、くもん出版、2009
- vii 川島隆太、安達忠夫、『脳と音読』講談社、2004
- viii 田島信元・佐々木丈夫・宮下孝弘・秋田喜代美、『歌と絵本が育む子どもの豊かな心－歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ－』、ミネルヴァ書房、2018
- ix ヴィゴツキー、L. S.『精神発達理論』、柴田義松訳、明治図書出版、1970 ヴィゴツキー、L. S.『子どもの知的発達と教授』、柴田義松・森岡修一訳、明治図書出版、1975
- ヴィゴツキー、L. S.『思考と言語（新訳版）』、柴田義松訳、新読書社、2001
- x トマセロ、M.『心とことばの起源を探る－文化と認知』、勁草書房、2006
- xi ブルーナー、J.『乳幼児の話しことば－コミュニケーションの学習』新曜社、1988
- xii コール、M.『文化心理学－発達・認知・活動への文化－歴史的アプローチ』、新曜社、2002
- xiii pp.25-54 汐崎順子、『日本の文庫：運営の現状と運営者の意識』Library and Information Science. 2013, no. 70
- xiv 石井桃子、『新編 子どもの図書館』、岩波書店、2015
- xv p33、羽生悦子、『赤ちゃんはことばをどう学ぶのか』、中央公論新社、2019
- xvi ヘレン・ケラー、『わたしの生涯』岩崎武夫訳、角川文庫、1966
- サリバン、『ヘレン・ケラーはどう教育されたか－サリバン先生の記録－』、榎恭子訳、明治図書出版、1995
- xvii DeCasper, A. J. & Spence, M. J. 1986 Prenatal maternal speech influences newborns' perception of speech sounds. *Infant Behavior and Development*, 9 (2), 133-150
- xviii 林明子、『おでかけのまえに』、福音館書店、1980
- xix モーリス・センダック、『かいじゅうたちのいるところ』、神宮輝夫訳、富山房、1998
- xx 林明子『おつきさまこんばんは』福音館書店、1986
- xxi かかくいひろし、『だるまさんが』、ブロンズ新社、2008
- xxii 土方久功作・絵、『ぶたぶたくんのおかいもの』福音館書店、1985
- xxiii 「乳幼児に読み聞かせるものとしての絵本とは何か」、絵本学会大会 2016年5月28日、白梅学園大学
- xxiv 瀬田貞二、『幼い子の文学』、中央公論社、1999
- xxv ロイス・レンスキー、『ちいさいしょうぼうじどうしゃ』、福音館書店、1970
- xxvi Ninio & Bruner, The Achievement and antecedents of labeling. *Journal of Child Language*. 5, 1-15
- xxvii p189、大藪葵、『共同注意－新生児から2歳6か月までの発達過程』、川島書店、2004
- xxviii 平山和子、『くだもの』、平山和子、福音館書店、1979
- xxix ディック・ブルーナ『しろ・あか・きいろ』、まつおかきょうこ訳、福音館書店、1984
- xxx p189、大藪葵、『共同注意－新生児から2歳6か月までの発達過程』、川島書店、2004

〈参考文献〉

- Nord, C, J. Lennon. B. Liu and K Chandeler (1999), *Home Literacy Activities and Signs of Children's Ederging Literacy* 1993 and 1999, United States Department of Education, Washington DC, 1999
- 内田伸子、「幼児における物語の記憶と理解におよぼす外言化・内言化経験の効果」 pp.19-28、『教育心理学研究 第23巻第2号』一橋大学、1975
- 今井むつみ、『子どもの発達の謎を解く』、筑摩書房、2013
- 今井むつみ・針生悦子、『言葉をおぼえるしくみ』、筑摩書房、2019
- やまだようこ、『ことばの前のことばーことばが生れるすじみち』新曜社、1987
- 麻生武、『身ぶりからことばへー赤ちゃんにみる私たちの起源』、新曜社、1992
- ガブリエル・タルド、『模倣の法則』、桶田祥栄・村澤真保呂訳、河出書房新書、2007
- OECD編著、『OECD保育の質向上白書 人生の始まりこそ力強く：ECECのツールボックス』、秋田喜代美他訳、明石書店、2019
- メアリアン・ウルフ、『プルーストとイカー読書は脳をどのように変えるのか?』、小松淳子訳、インターシフト、2008
- メアリアン・ウルフ、『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳ー「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる』、太田直子訳、インターシフト、2020

